三条ロータリークラブ週報　No. 39　●国際ロータリー会長　ビ

友達になろう

BE A FRIEND

1994―95年度国際ロータリーのテーマ

●国際ロータリー会長　ビル・ハントレー　●第2560地区ガバナー　大島 精次
●会　長――高橋 一夫　●副会長――石橋 育於
●幹　事――五十嵐晋三　●副幹事――松谷 昊吉
●ＳＡＡ――平原 信行　●副ＳＡＡ―清水 良一　●例会日――毎週水曜日　12：30～
●例会場――三条市旭町２―５―10　三条信用金庫本店内　ＴＥＬ　34―３３１１
●事務局――三条市旭町２―５―10　三条信用金庫本店内　ＴＥＬ　35―３４７７
ＦＡＸ　32―７０９５

出席者会員数　会員　79名中　55名

先々週出席率　90.67％（前年同期　90.79％）

先週のメークアップ

4／6　新潟西へ　捧　賢一さん

4／6　燕へ　近藤雄介さん

4／9　新津40周年へ（新潟）
野村竹三郎さん、五十嵐晋三さん、石橋育於さん、松谷昊吉さん、捧　賢一さん、高森章仁さん、岩井数央さん、渡辺宏策さん、小林敬典さん、平原信行さん

4／10　三条南へ　細井増雄さん、松谷昊吉さん、五十嵐総一さん、渋谷健一さん、斉藤弘文さん、山田富義さん

4／11　三条北へ　上木六治さん、山田富義さん、藤田紘一さん、林　光輝さん、外山一郎さん、西山徳厚さん

会長挨拶　高橋(一)会長

皆さん今日は。

先日、大林組の営業課長が来社され、こんな話をして帰られました。「私はちょうど一ケ月後の阪神の被災地に行ってまいりました。現地に立ってツーンと鼻を突く悪臭と目を覆うばかりの惨状はお茶の間のテレビを通して見ているのとは雲泥の差です」と。

私共は自衛隊がカンボジアやルワンダでＰＫＯに出動して、大変感謝されていることは新聞やテレビで知っていますが、恐らく一緒に現地に行ったなら大林の課長の驚きの何十倍もの惨状を見、御苦労に接し、又、時には感動に浸ったことと思います。

本日は現地に行ってこられた隊員の体験談を聞く機会に恵まれ、南クラブ、北クラブさんにもお話し、３クラブ合同の例会となりました。今日終りが２時半までですが御静聴下さい。

幹事報告　五十嵐(晋)幹事

◎三条地区交通安全対策協議会より

「チビッ子白バイ隊交通安全パレード」のお願いがとどいております。

と　き　　５月14日（日）ＡＭ９：00～

ところ　　（集合場所）長崎屋東三条店駐車場

◎例会変更のお知らせ！

三条南ＲＣ―４月24日（月）早朝例会　ＡＭ６：00　於 本成寺

――三クラブ合同講演会――

目に見える国際貢献活動　～ルワンダ難民救援活動に参加して～

防衛庁陸上幕僚監部広報室　３等陸佐　上口勝行殿

●はじめに

皆様こんにちは。ただ今ご紹介いただきました防衛庁陸上幕僚監部の上口３佐でございます。本日は、皆様方の三条市内三ロータリークラブ合同例会という、このような高い席にお招きいただきまして誠にありがとうございます。また、皆様方には平素から地元の自衛隊新潟地方連絡部、高田駐屯地、新発田駐屯地はもとより、防衛庁・自衛隊に対しまして深いご理解と多大なご支援をいただきまして厚く御礼申し上げます。

これから、私自身が参加しましたルワンダ難民救援活動で体験しました話をさせていただくわけですが、未熟者の私にとりましては、何百、何千、いや何万という数のルワンダ難民、そしてザイールという国の人たちの前に立っているよりも、本日ここで皆様方を前にしている方が非常に緊張しているところでございます。皆様方の貴重な時間を無駄にすることがないように一生懸命話をさせていただきたいと思いますのでよろしくお願い致します。

●出番は、ある日突然やってくる

では、早速本題に入りたいと思いますが、私は現在陸上幕僚監部の広報室という所で勤務しております。この３月で早や丸３年間が過ぎ、４年目に入ったところです。陸幕の勤務では、普通２年から３年で交代します。昨年８月で２年半となりまして、私ども陸上自衛隊では３月と８月が定期異動の時期ですが、私の異動はありませんでしたので、「来年３月で３年となるから異動は間違いない。いよいよ広報勤務も最後の段階、しっかり勤務しなければいけない。」と思っていた矢先に、突然「アフリカに行ってこい。」という話がこの私自身に飛び込んできたわけです。本当にそのような事が起こるなどとは全く思ってもみなかったことです。

皆様よくご存知のように、自衛隊は平成４年６月15日にＰＫＯ法が成立した後、国際平和協力業務、いわゆる国際貢献活動に参加できるということになりました。早速同年（平成４年）秋からカンボジアのＰＫＯ活動に約１年間参加しております。そして、平成５年の５月からモザンビークのＰＫＯ活動に参加して、今回の派遣が３回目ということになりました。

私は個人的にも、第２次カンボジア派遣施設大隊広報担当の予備要員に指定されていました。また、ＰＫＯ活動とは別に、国際緊急援助活動というものがあり、自衛隊はまだこの活動に参加したことはありませんが、いわば海外における災害派遣の必要が起こった場合には自衛隊の派遣もあり得るということで、その待機要員も命ぜられており、普段から多くの予防注射をうってもらっておりました。その頃の私の心境は、「俺は予備だから、まずお呼びではないだろう。こんなに多くの予防注射をうってもらうより、その分お金をもらった方がいいな。」などといい加減なことを思っていましたが、まさに人生一寸先は闇です。これまでお呼びではなかった私に、突然ルワンダ難民救援活動へのお呼びがきたわけですが、人間って本当にいい加減なものですが、この時の私は、「今までたくさんうってもらった予防注射は、本当に効果があるのかな。」という心境になったものです。

ルワンダ難民救援活動は、私自身にとってはもとより、自衛隊にとってもまさに「一寸先は闇」の中から

出てきたような突然の出来事であったと思っております。

私自身は、昨年の８月26日の夜、上司からの電話でルワンダ行きの話をもらいました。丁度その日は他の業務で職場に出ていなかったものですから、夜官舎に電話をもらった訳です。その時から、実に慌しく出発準備が始まりました。その後ほどなく、９月の11日には新しくルワンダ難民救援隊という派遣部隊が編成される北海道の旭川駐屯地に移動して事前訓練等に参加し、９月22日に救援隊が編成完結されました。そして９月30日に成田を出発し、２日後の10月２日に日本から約１万３千キロメートルも離れたアフリカ大陸、ザイール共和国のゴマという所に赴いたわけであります。

●気がつけば、はるかアフリカ大陸

ルワンダ難民救援活動ということで、「ルワンダに行ってきた。」と言っておりますが、ご承知のように、自衛隊はルワンダという国には入っておりません。ルワンダという国は、こちらの地図にありますが、今までに聞いたこともない国で、私が今さしている指の先ほどの小さな国です。四国の1.4倍ほどと聞いておりますが、赤道のすぐ下（南）にあります。私どもはこのルワンダの西側に隣接するザイール国のゴマという所に出かけたわけです。南にブルンジ、東にタンザニア、北にウガンダという国に囲まれた小さなルワンダ国では、昔からツチ族（少数派部族）とフツ族（多数派部族）の間の対立、紛争が繰り返されております。現在は少数派ツチ族が政権をとり、フツ族が難民として国外に流出していますが、１年ちょっと前は、逆の立場であったわけです。両者の立場は換言すると、虐殺という悲劇の加害者と被害者の立場です。現在もなおルワンダ国内に多数散在している虐殺の現場、ミイラ化した死体はほとんど現在政権をとっているツチ族であるということで、私どもは虐殺を行ったフツ族難民の救援に出向いたわけで、国際的な人道援助の難しさを痛感します。

昨年発生したルワンダ、フツ族難民の数は200万人とも言われ、そのうち140万人もがザイールのゴマ周辺に流れたと言われています。

●二つの派遣部隊が現地へ

自衛隊のルワンダ難民救援活動実施にあたり、２つの部隊が現地に派遣されました。私が参加したのが、陸上自衛隊の部隊として、実際に医療、防疫、給水その他の難民救援を行う神本光伸１等陸佐を隊長とする260名のルワンダ難民救援隊と、荒谷一元２等空佐を隊長とする約120名の航空自衛隊の空輸派遣隊が、空輸支援に任ずるためにＣ－130という輸送機３機をもって派遣されました。日本からゴマまで行くには、民間航空機の定期便で、イギリスのロンドンやフランスのパリを経由してケニアのナイロビまでは行けますが、そこから先の便がありません。ナイロビからゴマまでは約900キロメートルあり約２時間のフライトが必要です。現地では、ザイール航空という会社が週に１便ほどの定期便を飛ばしているようですが、この定期便以外でゴマに行くためには小型機をチャーターするのが

一般的のようです。本当に失礼な言い方ですが、私が絶対乗りたくないと痛感するほど、実にひどい飛行機でした。空輸派遣隊は、ケニアのナイロビからゴマまでの空輸、私ども自衛隊員とその関連物資はもとより、国連やＮＧＯ関連の人員や物資の空輸支援任務に就いたわけです。

●260名の派遣隊員が３波に分かれて現地へ

私どもルワンダ難民救援隊の指揮官、神本１佐は、派遣前そして帰国後も北海道旭川駐屯地で第２後方支援連隊長という指揮官職に就いております。260名のうち大半の240名が旭川や帯広など北海道の部隊等から参加し、残りの20名が私のように東京などから参加したわけですが、救援隊での私の任務は派遣前と同じ広報担当ということで、基本的な職務ではそんなに戸惑うことはありませんでした。

この席に、神本隊長が出向いて話をすれば一番効果的であると思うわけですが、地理的な制約等でこの私が代わりにご指名をいただいたわけですが、現地で主としてマスコミ対応等に任じた広報官としての体験の中から、少しでも皆様方のご参考になるようなことを紹介させていただければと思っております。

ルワンダ難民救援隊は、３波に分かれてゴマ入りしました。隊長が直接指揮する第１波100名が10月２日に、第２波約120名が10月12日に、そして残りの約40名はさらに遅れて10月27日に現地に到着したわけです。特に最後の約40名は、どうしてこうなったのかと言いますと、さきほど話した予防注射がその理由で、それまで全く予防注射をうっていなかった隊員たちで、救援隊の編成上必要となった者は、予防注射を済ませてから出発するために遅れたわけでう。勿論、人道援助では緊急性（スピード）が第一に求められるわけですから、この遅れは望ましいことではありませんが、自衛隊は「（予防注射なしでも）何とかなるだろう。」というような安易な考えは許しません。一方、私の仕事仲間となったマスコミ関係者の場合は、すべてはそうではなかったようです。現地取材のため急遽派遣される記者の中には予防注射の時間をとれなかった人も少なくなかったようです。

現地入りする時にはやむなく３波に分かれてしまいましたが、任務を終えて帰国する際はできるだけ少ないグループ区分で引き上げることを重視して、まず１波120名が12月15日に、そして２波140名が12月20日にそれぞれゴマを離れることになりました。私は、救援隊長と同様に、１波で現地入りし、２波で帰国しましたので一番長く現地にいたわけですが、丁度80日間現地にいたことになります。

●百聞は一見にしかず

本日は、皆様方にビデオをご覧いただける設備が整えられているということですので、非常に幸運だと思いますが、この度陸上幕僚監部広報室で企画監修したルワンダ難民救援活動の広報ビデオが完成しましたので、ご覧いただきたいと思います。

ルワンダから国境を越えて隣国のザイールに逃れた難民たち、そして国境を越えてその

難民救援に出かけた私ども自衛隊ですが、この「国境（ＢＯＲＤＥＲ）」をキーワードとして、「ＢＯＲＤＥＲ［国境を越えて］」というタイトルにしました。丁度30分間、少し長くなりますが、皆様方に現地の実相を少しでもイメージアップしていただくために、ノーカットでご覧いただきたいと思います。

【広報ビデオ「ＢＯＲＤＥＲ［国境を越えて］」上映（30分間）】

以上、30分間の映像で、勿論全てを表現することはできないわけですが、あらためてご理解を深めていただけたのではないかと思います。

このビデオの映像の中に、虐殺された死体や伝染病等で死亡した難民の遺体処理などの残酷なシーンがありましたが、このビデオを制作するにあたり、「（そういうシーンは）入れない方がいいのではないか。」というスタッフの意見もありましたが、特に私など大勢は、実際に派遣された現場の実相をご理解いただくために不可欠であるとして、何とか最小限とり入れることにしました。このような残酷なシーンの映像素材はかなりたくさんあったのですが……。

●事前情報は暗い話ばかり

今回、私どもが派遣されたザイール・ゴマの現地情勢等については、派遣前から色々と厳しい話ばかりでした。まず、カンボジア、そしてモザンビークに次ぐ３回目の海外派遣ということで、カンボジア、モザンビークともに全派遣隊員が無事に任務を果たしているわけですが、「３度目の何とか!?」と言いますか、「今度こそ何かが起こるかもしれない。」といった雰囲気でした。派遣先の難民キャンプはもとより、ゴマ市内の治安情勢も極めて悪い。難民キャンプでコレラや赤痢等の伝染病が多発するなど衛生環境は劣悪であり、その上、何時大爆発を起こすか予断を許さぬ活火山もあるというような、暗くなる話ばかりでした。

●劣悪な環境の難民キャンプ

派遣前の私自身の予想と、実際に現地入りして自ら確認した状況とを比較しますと、概して「それほど（思ったほど）でもないな。」と感じられました。ゴマに到着した直後は特に緊張したわけですが、無我夢中といった感じで、「これくらいなら何とかやっていけそうだ。」と確信できるような気がしてきました。しかし、治安にしろ、衛生環境、火山の活動状況等全て前評判を否定するものはひとつもありませんでした。

私どもの派遣前、既に先遣隊の要員20名余りがゴマ入りしていたのですが、ゴマ空港に最初に到着した時も、難民キャンプに入った時も、難民や現地住民の目は警戒心と言いますか、敵愾心と言いますか、とても厳しい視線でした。

その彼らの私どもに対する厳しい視線が、だんだん変わってくるんですね。だんだん友

好的に、親しみのある目に変わってくるんです。彼らが実際に私どもに触れ、そして私どもの活動、行動が彼らに敵対しないばかりか、彼らのためになるということが、時間をかければ必ずわかってくるわけで、そうなると彼らの視線や表情が和らいでくるわけです。

私どもが救援活動を行ったゴマの難民キャンプは４～５か所、救援隊の宿営地から車で近い所は20～30分、遠い所は１時間以上かかります。難民救援活動は、大きく医療、防疫、給水活動の三本柱と、その他緊急出動とも言えるような数多くの支援活動があったわけですが、防疫活動だけが主に難民キャンプの中で、多数の難民たちに見つめられて実施しました。

難民キャンプの暮らしは本当に粗末なものです。細い木で組んだ小屋に、国連難民高等弁務官事務所（ＵＮＨＣＲ）から支給された青や白色のビニールシートをかぶせただけのもの、ビニールシートがないものもすくなくありません。火山地域特有の堅固な土質で水はけが悪く、深い穴も掘れないことからし尿が混じった汚水があちこちに溜まっています。トイレも簡単に石を積んだだけのものや、ビニールシートでまわりを簡単に覆っただけのものです。そこで自衛隊の出番は、そのトイレなどを消毒したり、マラリアなどの原因となる蚊やシラミを駆除するための薬剤運搬やローカルスタッフに対するその散布要領の指導など、それからパワーショベルなどの施設機材で溜まった汚水を流すための排水溝や浸透枡（しんとうます）を造成しました。パワーショベルなどは、本来救援隊の宿営地開設のため持ち込んだものですが、予定外と言ってもよいと思われるこの防疫活動で威力を発揮しました。

●難民の子供たちの喜びが自分たちの喜び

一枚の写真をご覧下さい。12月11日、私どもの救援活動も終わりに近づいた日、難民キャンプでの最後の消毒活動を終えてマイクロバスで宿営地に帰る隊員たちを、難民キャンプの子供たちが喚声をあげながら手を振って見送ってくれているところです。このバスの中から私が撮った写真ですが、３か月間の救援活動の中で、私が特に気に入っているシーンの写真です。この子供たちのつぶらな瞳が生き生きと輝いているのに救われるような気持ちになります。彼らは、つい数か月前に難民となり、国を追われて隣のルワンダ共和国からここザイール・ゴマに流れてきました。おそらく私どもが全く想像すらできないほどの悲しく辛い体験をしたに違いありません。私どもの難民救援活動は子供だけでなく、大人たちにもたいへん喜ばれましたが、私は大人たちに対しては何か腹立たしさのような気分を抱きました。何故なら、彼らの国家がこのように凋落しているのは大人たちの責任であるからです。本当に明日の時代を担うこの子供たちのためにも大人たちの責任と役割は極めて大きいことを、難民たちの姿を見て痛感しました。いずれにしても、私どもの活動に直接触れた難民やザイールの人たちには非常に好感をもって受け入れてもらえたことを、彼らの表情や態度から確信することができました。

●舞台は、野生の王国アフリカ

私どもは野性の王国アフリカで難民救援活動を行ったわけですが、この「野性の王国」という言葉は、「弱肉強食の動物の世界」を意味します。現地では、ルワンダ難民は言うまでもなくザイール人のほとんどが実に貧しい暮らしを強いられています。場所によっては難民キャンプとザイール住民の部落が混交していますが、住民の子供たちもほとんど裸足で、見分けるのに苦労するほどです。ザイール人たちの住居も、まさに掘立小屋と言えるような粗末なものでした。日本のように、飽食と言われることも少なくないような恵まれた所では想像もつかないことですが、ほとんど全ての人たちが飢えている世界では、まさに「食うか食われるか」ということになることを自ら目のあたりにしました。例えば、武装しているザイール軍人たちが頻繁に善良な市民や難民たちを襲っているのです。事の真偽はわかりませんが、ザイール国のモブツという大統領は独裁者で、軍人たちに対する毎月わずかの給料も支払っていないという話でした。彼ら軍人は、昼間は何とか軍人の体をなしているように見えましたが、日が暮れて夜間になると、頻繁に発砲しているようでした。犯罪を未然に防止するための威嚇射撃か、自ら強盗、夜盗と化して発砲しているかは定かではありませんが、後者の場合が大半であるようでした。昼日中にザイール住民やルワンダ難民の間で暴動が起こったり、住民と軍人との間にトラブルが発生し、軍人が威嚇射撃により事態をおさめる場面も少なくありませんでした。私たちのゴマ入り直後の10月6日の午後、ゴマ空港の滑走路付近で、すなわち救援隊の宿営地のすぐ目前で発生した500人もの多数の住民たちと軍人との小競り合いが全く突然発生しましたが、私どもにとっては初めてのことで非常に驚きました。ただ、その暴動が自分たちに直接向けられたものではなかったために、割と平然としておれましたが、このようなトラブルに何時何処で巻き込まれないともかぎらないという心配は、最後の最後までつきまといました。

●交通事故も多発

現地の交通事情にもたいへん苦心しました。向こうでは、日本と違って右側通行です。車の数も少なくありません。ほとんどの車がオンボロで、廃車寸前と言う車も少なくありませんでしたが、私に言わせてもらえば廃車以下と思えるほどの車ばかりでした。フロントガラスのない車が、ある車より多いほどです。よく走るなあと思える車ばかりが、ものすごいスピードで走っています。カンボジアのＰＫＯの時にも自衛隊車両が交通事故を何件か起こし、中には現地住民が死亡するという人身事故もありましたので、ゴマでもそのような悲劇が起こらないかと心配していました。結果を先に話しますと、幸運にも救援隊は１件の交通事故を起こすこともありませんでした。バックミラーを少しこすったくらいです。

では、現地では交通事故はあまり起こらなかったかと言いますと、決してそうではありません。ＵＮＨＣＲの車両が正面衝突事故を起こしたり、各国の非政府機関（ＮＧＯ）の

車両などが路外に転落したりすることは、まさに日常茶飯事で、何回も救援隊に事故車両の回収などの支援要請があり、出動しました。このような環境下で救援隊の車両が１件も交通事故を起こさなかったことは、本当に幸運であったと喜んでおりますが、ドライバーたちの細心の注意にも並々ならぬ努力がありました。

●自己完結性（能力）が任務遂行の基盤

次に、自衛隊の自己完結性についてですが、ザイール・ゴマは、一時に100万人をこえる大量のルワンダ難民が流入して未曾有の大混乱状態となったため、ＵＮＨＣＲは各国政府に対して、必要な資機材、活動の運営及び資金など自己で責任を持つ形で活動を行うことを強く求めました。そこで日本国政府は、展開から撤収までを通して他に頼らず独力で活動することが可能な、いわゆる自己完結能力をもった自衛隊の部隊の派遣を決定したわけですが、実際に派遣されたルワンダ難民救援隊はその能力を遺憾なく発揮しました。

宿営地の開設は、最初に現地入りした100名の第１波の要員で始められました。ゴマ空港の敷地内に蛇腹鉄条網で周囲を囲み、その中に天幕を立てるのですが、日本国内で行う演習とは違って難儀なことでした。私たちの近くには多くの現地人、子供たちや大人たちが集まります。日本人と違って、スキがあれば物を盗みます。そのため、警備専門の隊員を何名も配置しなければなりません。また、緊急性（スピード）が求められる本来の難民救援活動を一刻も早く開始しなければならないため、救援隊長はじめ所要の者たちは早速難民キャンプの状況を視察したり、関係機関等との調整を始めました。私は広報官としてのマスコミの取材対応に追われました。

●マスコミの取材を受ける幸運

派遣期間を通じて、約150名ほどのマスコミ関係者が現地取材に訪れました。一番多い時で40から50名、少ない時でも15から20名ぐらいの記者さんたちが取材を続けましたので、お陰様で（!?）広報業務は連日多忙を極めました。

最初の海外派遣となったカンボジアでは、当初600名ほどの派遣隊員に対し、300名ものマスコミ関係者が現地を訪れたと聞きます。カメラやマイクを向けられての活動は本当に大変ですが、一面たいへん有り難いことでもあります。２回目のＰＫＯ活動となったモザンビークには、打って変わってほとんどマスコミの取材は入っていないようです。２回目となるとニュース性が低くなることに加え、モザンビークもゴマと同じ日本から約１万３千キロメートルも遠く離れた所です。活動内容も輸送調整業務ということで、ニュースの絵になりにくいといったことも、マスコミの足を重くした要因ではないかと思います。「モザンビークは忘れられたＰＫＯ」と揶揄（やゆ）されもしましたが、派遣隊員たちにはとても気の毒でした。

私たちのルワンダ難民救援活動には、今申し上げたように日本新聞やテレビ、ほとんど全社に近い人たちが取材に訪れました。カンボジア、モザンビークのＰＫＯと違って、初

めての人道援助活動であるというニュース性と、過去には自衛隊違憲と主張していた社会党の村山政権が自衛隊派遣を決定したということで、その活動をしっかり検証していかなければというマスコミの姿勢などが大きな要因だったのではと考えます。このことは実に有り難いことでした。取材が多くなるほど広報官としての仕事はたいへんですが、マスコミのニュースを通じて、はるか遠いアフリカでの私どもの活動が日本の国民の皆様や、広く世界の人たちの目に見えることになるからです。私ども救援隊の活動の成否を左右する要素が、マスコミ報道と言っても過言ではないと思います。その意味で、広報という重要な仕事をさせていただいたことに、私自身大きな充実感と感謝の気持ちで満たされました。

話が少し脱線しましたが、当初現地入りした100名のうち、人道援助活動を開始するための調整等に必要な人員や私のようにマスコミ対応する者を除いて、急ピッチで宿営地の設営が進められました。日中、明るいうちが勝負で、しかも毎日必ず１時間から２時間くらいの激しいスコールに見舞われます。雨衣を着けて、隊員たちは休む暇なく働きました。本来の救援活動を開始する前にクリアーしなければならないことがたくさんあったということを皆様に理解していただきたいと思います。

●難民救援活動開始

実際に、難民救援活動は、医療支援活動を10月10日から防疫活動を10月13日から、そして給水活動を10月20日から始めました。無論、物理的な活動準備はそれ以前に整いましたが、関係機関等との調整により救援隊に求められたのがこの時期になったということです。例えば、給水活動は10月19日までスウェーデンの給水支援チームが担当し、翌20日から12月17日まで一日も休むことなく自衛隊が担当、その後12月18日からはドイツのＴＨＷという給水支援チームに引き継がれたというように、それぞれの役割分担が明確に行われました。この役割分担ということがとても重要であったわけです。

宿営地開設後の自己完結について、まず治安対処（警備）についてですが、260名のうち約50名が警備隊の要員です。彼らによる直接的な警備と、隊員各人が「ケガするな、ケガさせるな！」という神本隊長の指導にしたがって事故の未然防止に努力しました。

●銃声は日常茶飯事

10月16日の夜には、宿営地近傍のザイールとルワンダ国境付近で、長時間（約50分間）の銃撃が発生し、宿営地の上空を流れ弾が飛ぶという事態が発生しました。この時は警備隊員も低い姿勢をとり、私たち他の隊員もコンテナなどの陰に身を寄せて事態の成り行きを心配していましたが、左脚の太ももに２発の銃弾を浴びて重傷を負った現地人男性が宿営地に逃れてきたため、小林医務官が野外手術システムで応急手術を施し、その後ゴマ病院へ移送しました。この患者は、「自衛隊がゴマに来てくれたお陰で、命を落とさずに済んだ。」と心から感謝していました。

この夜の銃撃をはじめ、ゴマではほとんど毎晩、宿営地の近くで銃声を確認しています。

このような状況で、銃声は私たちにとっては日常茶飯事となり、ほどなく慣れてきたようでした。

●食品検査や防疫も徹底

治安対処以外の自己完結性について説明を加えますと、糧食とする生鮮食料品等は、主としてケニアのナイロビで現地調達しましたが、宿営地への搬入の都度、食品検査を確実に実施しました。また宿営地内の防疫につきましても、頻繁に消毒を行い、特に車両や隊員が難民キャンプから宿営地に帰る度に、車両のタイヤや隊員の靴の消毒も怠りませんでした。

このような救援隊の行動に対して、一部のマスコミは、「自衛隊は難民救援に来ていながら、難民キャンプの消毒はほとんどやらず、自分たちの宿営地ばかり消毒している。」というような間違った報道をしていました。何故間違いであるかと言いますと、難民キャンプ等の現地の衛生状態の劣悪さはとても言葉では表現できないほどで、もし救援隊が防疫処置を怠ったことにより、宿営地の中で伝染病が発生したとしたら、それこそ本来の難民救援活動は完全にストップしてしまうことになります。万一、そのような事態が発生したとしたら、マスコミは何と報道するでしょうか。一見、利己的な行動に見られるおそれのあるこのようなことは、誤解のないようしっかり説明しなければならないことだと痛感しております。

●自己完結性のないマスコミの悲劇

また、派遣隊員の現地への移動が３波に分かれ、特に最後に現地入りした約40名の隊員は最初から１か月近く遅れて10月27日に到着したわけですが、もちろん望ましいことではありません。この理由は、予防接種に時間がかかったからであります。自衛隊は「時間がないから、たぶん大丈夫だろうからそのまま（予防接種はうたないまま）派遣しよう。」というようなことはやりませんが、一方マスコミの記者さんたちは予防注射もうたないで現地入りする方がいたり、全員がゴマ市内のホテルに宿泊して、そこで出される食事や自ら現地で求めたものを飲食していたわけです。また、特に夜間ですが真っ暗なゴマ市内等では強盗事件がまさに日常茶飯事的に発生していましたが、記者さんたちは夜間市内を単独で歩いたりしていたようです。そのような結果、殺傷事件は１件もありませんでしたが、不幸にも何名かは赤痢やＡ型肝炎等の大きな病気にかかったり、銃を突き付けられて多額の現金や腕時計などを強奪されたりしました。「命を取られなかっただけ良かった。」と当事者の言葉には、切実な恐怖感満ちていました。このような現実は、国民の皆様にはほとんど知られていないことだと思いますが、偽らざる事実であります。

さらに加えて、私どもの救援活動が終わりに近づいた12月６日に起こった日本のマスコミ関係者がチャーターした小型機が墜落した事故で、２名の邦人記者が亡くなったのが、私がこの派遣期間中で一番悲しかったことです。このお二方とは今回の取材対応で非常に

親しくなりましたので、今でも全く信じたくないことですが偽らざる事実であることに本当に悲しくなります。

言うまでもなく派遣間、救援隊で大病を患った隊員は一名も出ず、そのお陰で所期の任務を整斉と遂行することができたわけです。

●共生ための並々ならぬ努力

私どもは基本的にルワンダ難民の救援のために出かけたわけですが、行ったところはそのルワンダという国ではなくて、隣のザイールという国で、そこには多くのルワンダ難民はもとより、ザイール住民や同国軍人、さらには難民救援活動にあたる各国のＮＧＯ等の人たちがひしめいておりました。そのような場所に救援隊が後から入っていって、「俺たちはこんなことをやってやるんだ。」とか「これをやるためにやって来たんだ。」というような態度は絶対に通用しないわけです。そのような姿勢態度で行動すれば、たまたまルワンダ難民に対しては喜ばれたけれども、反面ザイール住民に対しては迷惑以外の何物でもなかったというようなことが多発するように思われます。そのために、自分たちができることをそれらの人たちが十分理解できるように説明することも重要ですし、また自分たちにどんなことが望まれているのかということをしっかり確認することがとても重要になります。救援隊はこのような調整などに十分過ぎるほどの時間と手間をかけました。他の機関等との調整が不十分なところは救援隊側から主動的に調整の場を設けたりもしました。さきほどお話ししたとおりですが、マスコミの間からは、「遅れてきた自衛隊」とか、「今頃ゴマにやって来た自衛隊には仕事がありません。」といったような視点をもって取材する傾向も少なくなかったようで、私どもは忸怩たる思いを持ちながらも、やるべきことを整斉と、淡々と実施しました。その結果、時間が経つにつれて救援隊の活動は徐々に現場の状況に浸透していき、その頃から周囲の外国人たちから意外な言葉を聞かされることができたのです。この言葉は、私自身が直接聞かされたもので、特に印象が深いのですが、「いやぁ、日本人は、自衛隊は素晴らしい。どうしてかと言うと、救援隊は本当に現地の人たちが望んでいることを、望まれているように行うことを第一義に活動している。」ということで、そこが今までゴマで救援活動を実施していた欧米諸国との大きな違いであると言うのです。「彼らは、自分たちがやるべきことを、自分たちで決めて来て、そしてそれを言わば一方的に現地に適用し、そのために現地では歓迎されるどころか、逆に反感を買うことが少なくなかった。そのことは彼らが撤退する時に、逃げるようにゴマを去って行ったことを見るだけで瞭然である。」と言うのです。この言葉は、救援隊の活動に対する国連関係機関やＮＧＯ等からの積極的な評価が時間とともに定着したことや、隊員の規律正しい仕事ぶりや現地住民、難民との様々な交流を通じて現地社会や難民からも高い評価を得たことを如実に表していると思います。

併せて、救援隊が現地での活動を終えて撤収する際には、神本隊長と小林医務官に対して、ザイール共和国からレオポルト騎士団勲章が授与されましたが、おそらくほとんど前例が見られないことではないかと思われます。

救援隊のゴマ滞在は、最初に現地入りして最後に現地を出発した者で、私もそうですが、丁度80日間となりましたが、この間神本隊長以下260名の隊員たちが、自己完結能力をフルに発揮し、共生のための努力を重ねたわけですが、これまでお話しましたように、実際に私どもが現地に出かけて行って、緊急性を求めながらも焦らず、慌てず、淡々と、当然やるべきこととして、真に難民たちのお役に立てることをやったことが実際に彼らの目に映ったことにより、自衛隊、ひいては日本人に対する良いイメージを持つことができたものと思います。そして、私ども自分自身が「やりたいこと」ではなくて、難民たちが「やってほしいこと」をやるように心がけて努力したことが、現地で真に受け入れられ共生できた大きな要因であったと確信するわけであります。

●任務の無事終了が貴重な体験となる

現地から引き揚げる時には、難民からもザイール人からも、「帰らないでくれ！」と懇願されました。あるルワンダ難民キャンプのリーダーが、「我々は、ＰＫＯの部隊に来てほしくない。ＰＫＯが来ても我々の暮らしは決してよくならない。しかし、日本の自衛隊はそうではない。我々は自衛隊を大歓迎する。」と力説した姿が、言葉が忘れられません。

100万人ものルワンダ難民の前で、わずか260名の私ども救援隊は余りにも微力ではありましたが、一応の任務終了ということで、一発の銃弾を発射することもなく、一名の犠牲者を出すこともなく、12月20日にゴマを離れました。そして、12月23日、無事成田空港に帰着し、翌24日に北海道の東千歳駐屯地で部隊解散となりました。私は、幸運にもクリスマス・イブの夜、４人の家族が待つ自宅に帰りましたが、私の不在間、家族にも何の事故もなく、このことが私にとっても家族にとっても今回のこことが非常に貴重な体験となる要因でした。

●視点を変えて得られる教訓

無事に帰国し、久し振りの家族団欒で正月気分を満喫し、慰労の意味も込められた長期の休暇をいただいている最中、１月17日の早朝発生した全く信じられない阪神・淡路大震災で、「出番は、ある日突然やってくる！」ことを改めて痛感させられましたが、２月６日から１週間ほど、私も広報の現地連絡調整要員として震災の現場を訪れました。ゴマから帰った直後であっただけに、実に複雑な心境でした。多くの仲間が災害派遣に出て、倒壊家屋の瓦礫処理や給水、入浴支援等で活躍している姿に感銘を覚えましたが、見方によっては、国内の災害派遣の現場で活動する彼らは、ゴマで働いた私どもよりもはるかに大変であるという同情も禁じ得ないほどでした。

フランス語、スワヒリ語といった、全く馴染みのない言葉の世界で、現地の人たちとの交流は極めて難しく、言葉が通じないことが大きなハンディであると痛感したものですが、

国内の大震災の現場では、まわりの被災者と言葉が通じることがとても皮肉に思えました。隊員たちは被災者の方々の感情を逆撫でしないように、余計な会話をひかえて黙々と作業していました。このような状況を目の当たりにして初めて、そういえばゴマでは、まわりの人たちと言葉が通じないことをいいことに、言いたいことを存分に喋りながら活動できたということを思い出しておりました。こういうことも、実際に自ら体験した者でなければわからないことではないでしょうか。

●おわりに

自らの汗を流して体験し、苦楽をともにした仲間たちと共感を分かち合えることが、自分の人生の生き甲斐とも言える想い出づくり、幸せづくりに直結するように思えます。未熟者の私は、この６月で満40歳となりますが、人生の半ばと勝手に解釈するこの時期に、ルワンダ難民救援活動という全く思いもしなかった貴重な体験を通して、国境を越えてはるか遠いアフリカの地で、現地の人たちと少なからずそれなりのコミュニケーションもできたことを心から喜んでいますが、これも自衛隊に入ったからこそと感謝しているところです。

月並みな言葉ではありますが、これらの貴重な体験をすることができたのも、健康であればこそ、体力があったればこそで、つくづく健康、体力の重要性を痛感しております。

皆様方もくれぐれも健康にご留意されますよう、そして今後とも何卒よろしくお願い致します。拙い話となりましたが、ご清聴いただき誠にありがとうございました。

挨　　拶　三条南クラブ　住谷さん

本日は、私共三条３ロータリークラブ会員に自衛隊上口様よりおいで頂き、大変に重要であり有意義なお話を大変に解り易くお聞かせいただきまして、大変に有難うございました。

私共がテレビ、新聞等で知りえます情報にはおのずと限界がありますし、昔から言われて居ります様に、百聞は一見にしかずと言う言葉があります様に、ルワンダの難民救済援護活動も現地の状態は今日のお話しをお聞きして、本当に大変だったという様子が少しは理解出来た様でございます。

ＰＫＯ法が通り、大規模な然も可なりの危険をともなう海外派遣はまだ初めてに近い事だと思われますが、皆様今後も海外から色んな要請が出てくると思われます。どうぞ今後も優秀な日本の自衛隊として世界の平和に貢献されます事をご期待申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。

本日は本当に有難うございました。